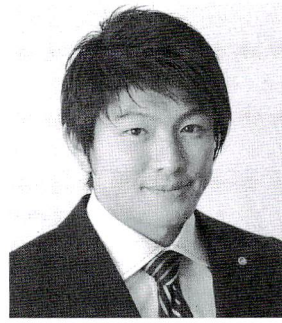


立ち上がれ！ 全国にいる龍馬たち



神谷宗幣

吹田市議会議員。龍馬プロジェクト全国会会長。1977年10月12日生まれ。07年、関西大学法科大学院卒、法務博士取得。その後2カ月間の選挙活動で、初当選。無所属一人会派「吹田新選会」を立ち上げる。10年、龍馬プロジェクトを始動させる。

志ある政治家でなければ
本場の改革はできない

21歳の時に海外に行って、同世代の若者と話す中で、「日本はこの先どうするんだ？」と聞かれた時に、それまで自分のことしか考えていなかった私は返答できなかったのです。

その後世界18カ国を廻り、最後にアフリカに行つて貧しい国を見た時に、これが世界の現実だと思いました。人権や平等という概念だけを振りかざしていても生活が守られるわけではなくて、やはり自分たちのことは自分たちでしないと駄目なのだ

と痛感すると同時に、日本に生まれてきたことに感謝できました。

22歳の時に、将来は政治家になろうと決めましたが、実家の事情で一旦、家業のスーパーを継ぎ、その後、高校の教師を経験した後、29歳で立候補し当選しました。

私がやりたかったのは教育です。

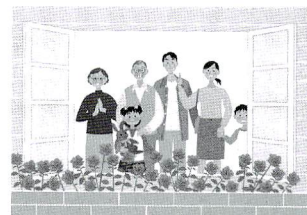
それは若い人の意識を変えないと日本は持たないと思ったからです。でもいざ議会に入ってみると、無所属の一人会派で、29歳最年少の若造は思いっきり浮いてしまい、なかなか意見も通らず、このまま議員を続けるべきかと悩んでいた時に、松下政経塾一期生の林英臣氏に出会いました。

た。

政経塾に、大阪府下の若い議員がたくさん集まって来たのを見て、吹田市だけでなく、範囲を拡げれば、思いのある人はいるのだということが分かりました。それが08年です。

時期を同じくして、橋下徹氏が大阪府知事に当選されました。彼も教育を変えようと宣言していて、僕と同じ思いなのではと期待して、「我々若手の地方議員と協力して大阪の教育行政を変えましょう」と手紙を書いたのです。すると橋下氏が乗ってくれて、09年に大阪教育維新の会ができたのです。

最初はそれで上手^{うま}く行っていたの



ですが、途中で橋下氏から大阪維新の会を作るといふ話がありました。その考え自体には反対ではなかったのですが、集まるメンバーが旧態依然の利権に絡んだような議員さんが多く、私たちはこれまでのしがらみを打ち破るための新しい組織を作りたいので、方向が違ふということとで大阪維新の会に入ることはお断りました。

龍馬プロジェクトが目指す 国家変革のうねり

2010年に龍馬プロジェクトを発足させ、2年半全国を廻り、自分たちの思いを伝え、チーム作りをし、現在では全国に250名の同志がいます。その仲間で二年間議論し、今年の4月28日に我々の考える日本のビジョンと、それを実現する「国是十則」といふ政策の柱を作りました。我々は元々これを船中八策と呼んでいたのですが、維新の会に使われてしまったので名前を変えました。

これは大まかな柱なので、これに基づいてネットなどを使い、国民と

の議論の中で具体的な政策を考えて行きます。

そしてその政策を、全国にいる200人ないし300人が草の根で訴えて行き、「今の政府がやっていることよりもいいじゃないか」という有権者の声が高まってくれば、政府に対して「我々は地方の現状に鑑み、地方にいる若手が日本の未来を考えてこういうものを作っています。支持もたくさんいただいているので、是非政府はこれをやってください」という形で具申をし、地方から国家体制を転換するうねりを起こして行きます。これが一つ。

もう一つは、それを言ったけれどもなかなかやってもらえない場合、自分たちの仲間を国政に送り出して、我々の政策を実際に動かして行くと考えています。

人気取りのために著名人をいきなり政治家にしたところで、力なんてないわけです。それくらいなら、例えば、20代で地方議員になった人と10年掛けて一緒に国家政策を考えて行きましようと呼び掛けます。

10年考えれば必ずよい政策ができますし、10年一緒にやれば信頼関係はばっちりです。しかも国会議員のように選挙を意識した政策でなく、純粹に国益にかなう政策を作れる可能性があります。国民に一番近い地方議員ならではの政策を。

そういう志を同じくして、目指す政策も同じ人たちが地方に1000人、2000人いるとしましょう。そんな組織日本にはありません。

自民とか民主とかみんなの党とか、政党を作るなんてできないと地方の若い政治家は思っているわけです。だからあるものに入るしかない。でも入れば党のしがらみがある。それでぶつぶつ文句を言っているのであれば、自分たちで発信力あるチームを作ればいいじゃないかというのが僕の発想です。

3年前、この話をした時は周りに笑われました。でも3年経った今、ここまでの組織ができました。つまり僕たちのような志を持った若者はたくさんいるということです。

(取材・文 稲生永明)

明日を創る

